
A LOVE STORY OF AN OLD LIGHTHOUSE

紫猫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

A LOVE STORY OF AN OLD LIGHTHOUSE

【Nコード】

N4834Z

【作者名】

紫猫

【あらすじ】

幼いころから、祖父と二人きりで、古い灯台に暮らすジェシカ。彼女には秘密の友達がいた。謎めいたアランは、いつもジェシカに優しい。ジェシカは祖父とアランさえそばにいれば、幸せだった。そしてある嵐の夜……。

第一話（前書き）

急にファンタジーっぽいものが書きたくなりました。（＊＾―＾＊）

第一話

小さな部屋の窓から見える景色は一面の海と、天氣が良くて空氣が澄んでいるときでさえもかすかにしか見えない対岸の街並み。

家事と勉強、ささやかな野菜畑の世話を終えた後、わたしは飽きることなく、窓からの景色を楽しむ。

時々通りかかる船の姿を目で追い、岸壁に打ち寄せる波の音やカモメの鳴き声を聞きながら。

そうしていると、一日の大半があつという間に過ぎてしまうのだ。

わたしが、この古くて大きな灯台に移り住んだのは、6歳の冬だった。

両親を事故で亡くし、たった一人の身寄りとは、孤島の灯台守である、母方の祖父だった。

何度か顔を見たことがあるものの、幼いわたしにとって、寡黙な祖父はそれは恐ろしくよそよそしく感じられ、夜毎母の温もりを求めて泣きあかした。

それでもいつしか、子供特有の順応性を發揮して、二人っきりの世界を楽しむことを覚えていった。

祖父は、最愛の妻であるわたしの祖母を病気で亡くして以来、人とかかわりを嫌い、灯台守の職を得てここに移り住んだらしい。わたしが生まれる何年も前のことだそうだ。

このあたりの海は昔から天候が変わりやすく、遭難する船が後を絶たなかったらしい。

島はごつごつした岩が多く、小さな港からちっぽけな手すりのついた階段がくねくねと延びており、島の頂上にそびえる灯台へと続いている。

祖父は無口だが、とても思慮深く穏やかな人で、わたしがこの島で快適に過ごせるようにいつも気遣ってくれた。だから、対岸の都会に住みたいなど一度も思ったことは無かった。

週に一度、天気が良ければ、祖父と二人で船に乗り対岸の街へ買出しに出かける。

島では、豊富に魚が採れ、そして裏庭でニワトリを飼い、野菜も自分たちの食べるくらいは作っているので、それ以外の食材や生活必需品、新聞・本等を買求めた。

わたしは学校に通わずに、通信教材で祖父に勉強を教えてもらうことになった。

外国船の船長をしていた祖父は、教養があり、いくつか外国語も話せた。

勉強に飽きると、わたしはいつも祖父に遠くの国のお話をねだった。

普段無口な祖父は、案外話が上手で、いつの間にかわたしまで見知らぬ国を訪れている気分になったものだ。

「ジェシー、来てごらん、今日は大物が網にかかったようだ。」

祖父と暮らし始めて7年が過ぎ、わたしは13歳になっていた。

急いで海岸に降りると、そこには興奮気味の祖父と、網に絡まってもがいているシャチの子供。

泳いでいるのを遠くから見たことはあったが、近くで見るととても大きく、迫力がある。

「おじいちゃん、さすがにこれは食べないでしょう？ 放してあげて。」

「こいつはまだ小さいが、シャチは海の暴れん坊なんだよ。魚は食い荒らすし、時には船とぶつかってひっくり返したりもするんだよ。」祖父は、網の中で暴れまくっている獲物を処分するつもりでいるらしい。

「身体が大きくなれば、食べる量が増えるのは仕方ないでしょう？ わたしたちだって海から魚を分けてもらってるじゃないの。……まだ子供なんでしょう？ お父さんとお母さんがこの海のどこかで心配してるわ。お願い、海に帰してあげて。」この生命の塊のような、大きくて美しい存在を、わたしはどうしても助けたくなくなった。

必死の懇願に、最初は渋い顔をしていた祖父も、可愛い孫娘の目に

浮かんだ涙にほだされ、せっかくの獲物から網をそつと外し、海に逃がしてやることにした。

幸い致命的な怪我をしていたわけではないので、シャチの子供はあつという間に海岸から遠ざかりすぐに見えなくなった。

「やれやれ、今夜は嵐になりそうだ。今日は野菜と豆がたっぷり入ったスープを作ってくれないか。」祖父は孫娘の頭に大きな手を乗せて、微笑んだ。

成長するにつれ、孫娘はどんどん美しくなっていく。プラチナブロンドの髪と、亡くなった妻にそっくりな大きな優しいグレーの瞳。

それから数日して、わたしに初めてのお友達が出来た。

いつものように家事と勉強を終え、お昼を済ませた後、わたしは一人で海岸沿いを散歩していた。

秋も深まり、風も冷たくなってきたのでわたしは去年祖父にプレゼントしてもらった赤いジャケットを、お気に入りの白いセーターの上に着ていた。

「こんにちわ、お嬢さん。気持ちの良い天気だね。」

ポカポカと日当たりのよい、お気に入りの岩に腰掛けて、水平線を見つめていたわたしは、突然声を掛けられて、思わず岩から転げ落ちそうになるほど驚いた。

「っ！！！？？？　こ、こんにちわ。　あの、だれ・・・ですか？」

振り向くと、わたしと同一年くらいの男の子が立っていた。

ローゲージ編みの黒いセーターにジーンズ、黒い革のブーツを履いている。

まっ黒の髪は、少し長めで軽く毛先がカールしている。形の良い眉と髪と同じく黒い瞳がきらきら輝いている。　少し大きめの口でにこっと笑いかけてくる。

週に一度、祖父と街へ船で買いだしに出かける時と、時折島を訪れる漁師や祖父の友人以外とは話をしたことも無く、元来の引っ込みじあんも相まって、わたしには友達と呼べる存在が居なかった。

当然、同じ年頃の男の子とも話をしたことも無く、驚きと戸惑い、そして恥ずかしさで頬が一気に熱くなった。

「俺は、アラン。この近くに住んでる。」

近く・・・？？？　この島は孤島で、周り360度には、何も無い。船で一時間ほどかかる対岸の街以外人が住む場所はなく、”近く”という表現がよくわからなかった。

アランはわたしの方に手を差し出した。アランに”近く”の意味を聞こうと思っていたのに、気がつくとなわたしはその手を握っていた。

アランの笑みがますます大きくなる。とても嬉しそうに、首をかしげてわたしの顔を見ている。

「わたしは、ジェシカ。 おじいちゃんは、ジェシーって呼んでるけど。」

「ジェシー。可愛い。名前も可愛い。」アランは、いかにも慣れた感じでウインクしてきた。

「……ありがとう。」予期せぬほめ言葉に、お礼を言うのが精いっぱい。 耳まで真っ赤になっていたと思う。

わたしの手を包むアランの手は大きくて、力強くて温かった。

手をつないだまま、わたしの案内で2人は島を散策した。

一生分のおしゃべりをしたかと思うほど、わたしは話続けた。島での生活、将来の夢……。

人見知りで、恥ずかしがり屋のはずなのに、初対面の相手にこれほど瞬時に心を許すなんて、自分でも信じられなかったが、アランの黒い瞳はどこまでも優しく、わたしの話をいつまでも楽しそうに聞いてくれた。

水平線の向こうに太陽が沈んでいくのを2人で見守る。

わたしはアランを夕食に誘った。結局どのだれかわからないままだったが、この島にはわたしと祖父の住む灯台以外に建物は無い。

「俺の家族が心配してるだろうから、今日のところは帰るよ。そろそろ迎えが来るころだから。」

アランは残念そうにため息をつく、わたしの頬をそつとなでた。

わたしは急に不安になった。もしかして、自分の事ばかり話して、呆れられたんじゃないか。学校にも行ってないわたしの話はつまらなかつたんじゃないか。

彼は二度とわたしに会いに来てくれないんじゃないか。アランの顔をじっと見つめると、彼は少し困ったように眉をひそめた。

「そんな顔しないで、可愛いジェシー。すぐは無理だけど、また会いにくるよ。暗くなる前に、家に帰りなさい。」

「今日はわたしばかり話してごめんなさい。アランの事もっと知りたい。こんなに楽しかったことなんて無いもの。わたし、待てるから、絶対に待ってるから、必ず会いに来てね。」

「約束するよ。……そしてこれは、約束のしるしだよ。」そう言っ、わたしの手にキラキラ光る髪留めを乗せた。

大粒の真珠とルビーが連なる、素晴らしく高価な贈り物。

「アラン? ……こんなの、わたし頂けないよ。」慌ててアランの手に戻そうとするが、アランは笑って首を振り、わたしの髪につけてくれた。

その時、アランの吐く息が、わたしの頬を掠めた。

「綺麗だ。ほら、君の赤い上着によく似合うよ。次は何か他の物を

もってこよう。」そう言って、いたずらっぽく笑ってまたウインクした。

こんな島にわざわざ迎えが来るとか、初対面の相手にポンと気前よく宝石をプレゼントするとか、彼はもしかしたら、とんでもないお金持ちの息子かもしれない。

そんなことを考えながら、アランにせかされるまま、一人家路を急いだ。こんな時間まで外に居たことはかつて無かったので、祖父はさぞかし心配しているだろう。

別れ際、アランは真剣な顔で、自分の事は、祖父には内緒にするようにと言った。祖父に知られたら、自由にジェシーを訪れるのは難しくなると言われると、彼の言葉にうなずくしかなかった。

時は穏やかに過ぎて行った。わたしが成長するにつれ、祖父は年老いていく。

気がつくと、祖父の髪の毛は真っ白になり、背中も丸くなった気がする。寒い日には、こっそり神経痛の薬を飲んでいるようだ。

約束通り、週に一度くらいの頻度で、アランはわたしに会いに来てくれた。

2人が出会ってから3年が過ぎ、今では心の底から大事な友達と言える存在になっていた。

アランがいなければ、わたしは孤独の中でどこか壊れた人間になっていたかもしれない。祖父と二人の生活は何よりもかけがえのないものであったが、それでもわたしはいつもアランの事を考えていた。

2人で過ごす時間はいつもあつという間で、わたしは誰にも話せない胸の内を何もかも打ち明けた。

彼はいつも黒い瞳を輝かせてわたしの話を聞いてくれて、そして自分の迎えが来る前にわたしを家に戻した。初めて会った時のように、別れ際に、高価なものをプレゼントする事もあった。祖父に見せるわけにもいかず、わたしは母の形見のジュエリーボックスに貰ったものを大切にしまいこんだ。

彼の話信じるならば、彼は対岸の街に住む、普通の（ここはわたしには大いに疑問だった）少年で、父親は漁師ではないが、船を沢山所有しているそうだ。父親が趣味の釣りに出かける際に、この島まで乗せてもらっていると言っていたが、わたしは彼の父の船を見たことも無く、ましてや彼の父に会ったことも無かった。

わたしはいつでも彼の話聞いたが、彼は自分の事を語るのはあまり好きではないようだった。

いつか彼の家にも遊びに行きたい。彼を祖父に紹介したい。そんなことを夢見ながらも、無理にねだるような事はしなかった。アランが困った顔をするのがわかっていたから。結局のところ、わたしは彼に会えればそれで満足だったのだ。

アランの体つきは、初めて会った頃よりも数段がっしりと大きくな

り、力強い顎の線や、自信たっぷりの立ち振る舞いは、見ていられればるほどのだ。

彼に対する私の気持ちには、もしかしたら友情だけではなく、いつしか恋と呼ばれるものが育ち始めていたのだろうか。

この島のいたるところに咲く、白く可憐な花が揺れる静かな草地で、わたしたちはいつものように海に向かって並んで座る。

ここは2人の秘密の場所。

アランの手はわたしの小さな手をすっぽりと包みこんでいる。

「今度の誕生日に、おじいちゃんが子猫をプレゼントしてくれるって。」アランのために焼いたクッキーの入った袋をあけて、差し出した。

「そうか、ジェシーは17歳になるんだね。」アランはあいている手でクッキーをつまんで口に放り込んだ。美味しいねと微笑んでくれるのが嬉しい。

「そうなの。アランと一緒にの年になるね。」

「誕生日のプレゼント、何が良い？」

「誕生日じゃなくても、アランはしょっちゅう何かすごく高そうなおプレゼントくれるじゃないの！わたしのためにお金を使わないでほしいの。わたしは欲しいものなんて無いから。」わたしは必死で首を横に振った。

「ジェシーは可愛いから、綺麗なものを贈りたくなっちゃうんだよ。」そう言って、二つ目のクッキーをつまむ。アランはいつも黒っぱ

い服装をしている。クツキーのかけらが、上等の黒いセーターにパラパラと落ちた。

4月も終わりに近づき、海からの風が心地よい。

夏になると、わたしたちは海で泳いだ。一人では危険だから絶対に泳がないようにと、アランは何度もわたしに言い聞かせた。彼はとても泳ぎが上手く、わたしは全然ついていけなかった。泳ぎ疲れた後は、暖かい草地に寝そべって、うとうとと昼寝をしたものだ。

そんなことを思い出しながら、わたしはアランの端正な横顔を見つめていた。

「わたしね、眠る前に神様にお祈りするときに、いつも同じことをお願いするの。おじいちゃんがいままで元気でいますように。それから、ずっとアランと仲良くいられますようにって。」

言ってしまうと、急に恥ずかしくなった。アランはいつもわたしを可愛いとか、綺麗だとか言ってくれるけど、わたしが彼の事をどう思っているかなんて口に出したことはなかったから。

優しくて、聞き上手で、ハンサムな彼の事だ。街に戻れば、お洒落で楽しい都会育ちの女の子が沢山まわりを取り囲んでいることだろう。

それにひきかえ、わたしは世間知らずで何の取り柄も無い女の子。電車に乗った事も無いし、映画を見たことも無い。家には古いラジオだけで、テレビも無いのだ。流行の服装などわからないし、お化粧にも縁が無い。こんなわたしという、アランは本当に楽しいの

だろうか。

いつまでもわたしに会いに来てくれる保障など無い。ましてや、わたしは彼の家も、電話番号も知らないのだ。

そう考えると、急にのどの奥が締め付けられて、涙があふれてきた。

「何も要らないの。ただ、アランがこうやって会いに来てくれるだけで良いの。わがままかもしれないけど、アランに会えなくなると思っただけで、目の前が真っ暗になっちゃうの。どうしていいかわからなくなっちゃうの。お願いだから、突然消えたりしないでね。」

「ああ勿論。ジェシーが望むなら、俺はずっとそばにいるよ。約束する。だから、泣かないで。今まで俺が約束を守らなかったことなんて、無いだろう？」アランは親指でわたしの涙をぬぐいながら、まるで小さな子供を慰めるような口調でそう言った。

湿っぽい場面はすぐに去り、わたしたちはいつものように笑いあって過ごした。アランが約束を破った事は無い。

わたしはとても幸せな気分になっていた。

第二話

その夜、わたしは暖炉の前のラグに胡坐をかいて座り、飼猫のポーシャにブラッシングしていた。

茶トラでタレ耳のポーシャは、甘えん坊の女の子で、首に結んでいるピンクのリボンは例のごとくアランからのプレゼントだった。

嵐が近付いているので、祖父は少しピリピリしていた。

ブラシをかけられてすっかり眠くなってしまったのか、いつもの柔らかなクッションの上でポーシャが丸くなったので、わたしは祖父のためにウイスキーがたっぷり入った紅茶を入れようと台所に向かった。

お湯が湧くのを待っている時、ドンドンドン！と玄関のドアが乱暴に叩かれる音がして、続いて祖父と別の男性の声が聞こえてきた。何事かと、わたしも急いで玄関に走って行った。

そこには、全身ずぶぬれの背の高い男の人が立っていた。途方に暮れたような顔をして、荒い息をして震えている。茶色の髪からは、水がぽとぽと落ちていて、足元の床も水浸しになっていた。

「ジェシー、この人が使う、タオルと適当な着替えを持ってきてくれないか？」祖父が振り向いてわたしに話しかける。

わたしは急いで清潔なタオルと、祖父のタンスから着心地のよさそうな服を選んだ。

タオルと着替えを祖父に渡すと、祖父はすぐに彼をバスルームに連

れて行った。温かいシャワーを浴びるように告げているようだ。

「沖で嵐に気付いて、街に戻ろうとしたとき、船の調子が悪くなったらしい。灯台の光を目指してなんとかこまでたどり着いたそう。全く運の良い人だ。」祖父は彼の事をそう説明すると、わたしに温かい食べ物と飲み物を用意するように言った。

「これは、わたしの孫娘、ジェシカです。」バスルームから乾いた服を着て出てきた彼に、祖父はわたしを紹介した。

人懐っこそうな焦げ茶色の瞳を見上げた時、雷に打たれたように心臓がどきりとした。

「リースと申します。こんな夜遅くに、迷惑かけてすまなかったね。」低音の柔らかな話し方は、わたしのような世間知らずでもはつきりとわかるほど、上流階級のアクセントだった。

「とんでもありません。リースさんが助かって本当に良かったです。あの・・・お口に合うかわかりませんが、スープを用意しましたので、もしよろしければ・・・。」
わたし、ちゃんと話せてるかしら？どきどきして、足が震える。

「ありがたい。早速いただくよ。」にこりと微笑みかけられて、一瞬地面がぐらっと揺れた気がした。

思い返せば、わたしはその瞬間に彼に恋をしてしまったのかもしれない。

リースは本当にハンサムだった。まるで母がコレクションしていた、

ハッピーエンドの恋愛小説に出てくる王子様のように。（最近わたしはそれを物置で発見して、祖父に内緒でこっそり読んでいるのだ）
つやつやの茶色の髪の毛は、柔らかそうにウェーブがかかっている、
良く笑うのだろう、目元にはかすかに笑い皺があった。素朴な祖父
のブルーのシャツも、彼が着ると一流ブランドのお洒落な服に見え
た。

遅い夕食をとる間、彼は祖父とわたしに自分の事を話してくれた。

25歳だという彼は、大学を卒業した後、銀行家の父について、見
習いのような仕事をしているらしい。ゆくゆくは父親のあとを継ぐ
予定とのことだ。

暖炉の火の光を受けて、リースの髪の毛がつやつやと輝いている。

うつとりと彼に見とれていた自分に気付いて、わたしは落ち着かな
くなった。

急いで立ち上がると、「スープのお代りはいかがですか？」と彼に
尋ねた。

しゃんとしなければ。

彼は都会に住む大人で、代々銀行家の家の一人息子なのだ。ポカン
と口を開けて見とれて良い相手じゃない。

なぜいけないの？ いいじゃないの。こっそり見つめるくらいなら。

彼がここに居る間くらい、あこがれの気持ちを持ったって、彼に迷

惑がかかるわけじゃないし。

それに嵐がおさまって、彼がここを去ったら、もう二度と会わないんだし。

100歩譲って、偶然街のどこかで再会したとしても、わたしは相変わらず地味な格好で気付いてさえも貰えないだろうし、彼の隣には、彼にお似合いの綺麗で知的で洗練された女性がいるはずだ。

彼はスープのお代りは断ったが、代わりに紅茶をもう一杯頂けないかと答えた。

祖父は、彼の紅茶のカップにもたつぷりとウイスキーを注いだ。

眠っていたポーシャがわたしの前を通り過ぎ、甘えるようにリリースの足に身体を何度かこすりつけた。

「可愛いね。君の猫かい？」

「はい。祖父がプレゼントしてくれたんです。誕生日に。ポーシャと言います。」

「素敵なプレゼントだね。君はいくつなんだい？お嬢さん。」

「先月17になりました。」

アランは、17歳の誕生日に、17粒のダイヤモンドがついたブレスレットをプレゼントしてくれた。

その輝きは、夜空の星を全部集めたかのようで、わたしはもったい

なくて、どうしていいかわからなかった。あれほどのものは要らないと言ったのに、アランはいつでもわたしに甘過ぎるのだ。

リースは、ポーシャを慣れた手つきで抱き上げて、膝に乗せて優しく背中をなで始めた。

わたしは一瞬ポーシャに嫉妬した。

「女性に年齢を訊くなんて不作法な真似をしてしまったね。」

「そんな。」 女性”扱”いされて、頬がかつと熱くなる。

「君の瞳の色は、珍しい色だね。今日は一日中、海とにらめっこしていたけど、嵐が近づいてきたときの海が、確かそんな色だったよ。うな気がするよ。」

「海の色……ですか？」

「うん。じっと見つめてたら、溺れそうになる。」 リースの声が一段と低くなったような気がして、わたしの身体はしびれてしまったかのように動けなくなった。

安楽椅子に腰掛けていた祖父が、ゆっくりと立ち上がり、お疲れでしょうからそろそろ寝室にご案内しますとリースに声を掛けた。

リースは立ちあがって、わたしの腕の中にポーシャを戻すと、礼儀正しくお休みなさいと言って、客室に消えた。

わたしは眠る前に、いつもミルクを温めそれにたつぷりと蜂蜜を入れて飲んでいく。

湯気の出ている小さな鍋からミルクを自分のカップに注いでいるとき、祖父が遠慮がちに台所に入ってきた。

リースに対するわたしの反応の事で、何か言われるかと思って身構えたが、祖父はそのことには触れず、ただ一言、今夜は少し冷えるから温かくしてお休みとだけ告げて、自室に戻って行った。

祖父の考えていることは言われなくてもわかっている。

リースは上流階級の人間で、わたしとは縁のない世界の人だということ。

祖父がそれを声に出さないでいてくれたことを、しみじみ有難いと思った。

もしはつきりと告げられたら、そしてその声にほんの少しでも憐みを感じ取ってしまったら、あまりにもみじめで、我慢できずに泣いてしまったかも知れないから。

祖父にはわたしの泣き顔を見られたくなかった。祖父の心の負担になるような真似だけは出来ないと思った。

でもアランなら。

わたしはそつと溜息をついた。

アランの前でなら、わたしはいつでも本当の気持ちと言える。

アランに急に会いたくなった。

今の気持ちを全部訊いてほしかった。

ねえ、信じられる？

一目惚れなんて、小説の中か映画の中でしか起こらないと思ったの。

アランにそんな話をしている自分が目に浮かぶ。

いまだに彼の連絡先を知らないわたしは、天候が悪いならなおさら会えるのはずいぶん先だろうと思って、ますます落ち込んでしまった。

荒れた天気がおさまるのに3日、リースの豪華なクーラーザーを修理するのに2日かかった。

その間、わたしは殆んど食事のどを通らず、それでも妙に浮足立った気持ちで毎日を送った。

リースが笑いかけてくれるだけで、周りの世界が急に色めき立つのだ。それでも祖父の少し心配そうな顔に気付く度に、ちゃんと自分の立場をわきまえないと気を引き締めた。

気さくなリースはとても話上手で、驚いたことに料理も相当な腕前だった。

大学生のときに一人暮らしをしていて、その時に料理に目覚めたらしい。

裏庭の野菜畑と一緒に野菜を収穫したり、リースから新しいレシピを教わるのはとても楽しかった。

天候が安定した日に、もしかしたらアランに会えるかもと、いつもの岩場に行ってみたが、一時間近く待っていても、彼は現れず、わたしはあきらめて家に戻った。

「本当にお世話になりました。この灯台の光が目に入らなかったら、僕は今頃生きて無かったでしょう。感謝してもしきれない。」

リースが祖父とがっちり固い握手をしている。リースのクルーザーは、すっかり元通りにメンテナンスされ、後はこの島を離れるばかりである。

リースは出身大学のロゴが入った白いTシャツの上に、紺色のパーカーを羽織って、カーキ色のハーフパンツを履いている。

嵐が収まった後、わたしはクルーザーに残してあった彼のずぶぬれの荷物を、まるごと全部洗濯して乾かしたのだ。

祖父と握手を交わした後、リースがわたしの方に振り向いた。

いつもの優しい笑顔が眩しすぎる。

「ジェシカ……。僕の大事なお嬢さん。本当にありがとう。君に会えて、僕は。」

わたしはリースをじっと見上げた。笑顔を作ろうとして、見事に失敗してしまった。

ポロリと涙がこぼれて、慌てて袖で拭いた。しゃくりあげそうになって、慌てて息を止める。

「どうぞお元気で。さようなら。」

それだけ言うのが精いっぱい、その時リースがどんな顔をして自分を見つめているかわからなかった。

くるとリースに背を向けると、灯台に上って行く階段を一気に駆け上がった。

波の音と、カモメの鳴き声に混じって、リースがわたしの名前を叫ぶ声が聞こえたような気がしたが、それを確かめる勇気は無く、ただただひたすら全力で走った。

大声で泣きたかった。誰もいない場所で。

うんと遠く離れた場所に行きたかった。

この小さな島の港から。

爽やかな顔を申し訳なさそうにくもらせたリースから。

わたしからリースを奪っていく、リースのクルーザーから。

そして、辛そうに、わたしを見つめる祖父のまなざしから。

いつもアランと2人でおしゃべりしながら海を眺めていた草地にたどり着くと、そこにはアランが居て、わたしの泣き顔を見て顔をしかめた。

「ジェシー。」ここへおいでというふうに、両手を広げている。

アランの温かい腕の中に飛び込んだ。

「あの人が……。リースが行ってしまったの。もう会えないの。それなのに、ちゃんとお別れ言えなかった。最後にありがとうって言いたかったのに。途中で泣いちゃって、そのままここまで走ってきたの。」

「好きなの？彼の事が。」

「ひ、一目惚れ？……。なのかな？ おかしいね。彼の事殆んど知らないのに、頭がぼーっとなっちゃって。切なくて気持ちが不安定になって。」

「そう。」

「苦しいの。胸が苦しくて、すぐにアランに話を聞いてもらいたかったけど、会えなくて。誰にも言えなかったから余計苦しかったよ。」

「ごめんね。すぐに会いに来れたらよかったね。」アランは少し悲しそうな顔で、わたしの髪を撫でている。

「ううん。気にしないで。アランだって、忙しいでしょう。それにね、今日だって、会えるなんて思ってたのよ。・・・だからいっそう嬉しい。会いに来てくれて、ありがとう。」アランにしがみつく腕にギュッと力をこめた。

「俺も嬉しいよ。俺のジェシーがやっと笑ってくれたから。」いつも優しいアランに似合わない皮肉な口調に、わたしはハツとした。

「アラン・・・？」

「アイツなんかには渡さないよ。ジェシーはずっと俺のそばに居るんだ。ジェシーだってそう言ってたじゃないか。俺のそばに居たいって。そうだろ？」

「え？」

「ジェシーは俺の事だけ見てれば良いんだよ。アイツなんかより俺の事を好きになってよ。」

「アランの事は大好きだよ。わたしはいつもアランの事思ってるの。」

「友達のようにか？それとも兄貴のようにか？・・・違う。それじゃ足りないよ。今まではそれでも良いって思ってた。でももう駄目だ。ちゃんと見てよ。男として。俺の事を。」

「わからないよ。急にそんなこと言われても。だってアランは13の頃からずっと一緒で。」

「俺は最初から好きだったよ。ジェシーの事が。誰よりも愛してる。」

アイツじゃなくて俺を見てよ。」

わたしは、途方に暮れた。

2人は、出会ってからずっと無二の親友だった。

今朝、リースが島を去って行ったことは確かに心底辛い事だけれども、それでもアランに二度と会えないと告げられるよりは、ダメージは小さいと確信できる。

アランとリース、どちらに対する愛が深いかと言えば、勿論アランに対する気持ちの方が大きくて深いのだ。

けれどもそれが男として愛してるのかと問われると、わたしには判断がつかなかった。

今自分が持てあましている、リースへの恋心と、少女のころから抱いてきた揺るがないアランへの親しみや愛情はやはりどこか違うような気がするのだ。

「アランの事大好きだよ。私にはアランしかないの。だから、嫌いにならないで。」アランの気持ちに答えられなければ、見捨てられるような気がして、急に怖くなった。

「ジェシー、泣かせるつもりはなかったんだ。ただ、俺をちゃんと見て欲しくて。」

「見てるよ。だから、消えたりしないで。もう会わないなんて言わないで。アランに会えなくなっちゃったら、どうしていいかわかん

ないよ。」

「そんなことするもんか。ずっとそばに居るから。アイツの事は忘れるんだ。・・・わかったな？」

「わかってる。忘れるも何も、もう二度と会うことは無いの。初めから、かなわない相手だったの。住む世界がちがうんだよ。」

「ジェシーはアイツにはもったいないくらいの女の子だよ。可愛くて————、クッキーを上手に作れて————、働き者で————、優しくて————。」

「ふふふっ。そんなに褒めても何も出ないよ。でも、次会うときは、アランのために、クッキー沢山焼いておかないかね。」

「え？ばれちゃった？何しろ俺は、ジェシーの焼いたクッキーがこの世で一番大好物なんだから。」アランはいつものように、ニヤリと笑ってウインクしてくれた。

アランは昔からわたしを泣きやませるのが上手い。

夕暮れの中一人で帰途につきながら、今は辛いけど、アランと過ごすうちに、いつかは失恋の傷も癒えるだろうと考えていた。

そう。元の世界に戻っただけ。

おじいちゃんと、わたしと、そしてアラン。

確かにそれで充分幸せだったんだから。

第三話

「申し訳ありません。僕はお嬢さんを泣かせてしまったようです。」
細い階段を駆け上がるジェシカの後ろ姿が見えなくなった後、リースはジェシカの祖父であるタイラーに頭を下げた。何度か名前を呼びかけたが、彼女は一度も振り返ることなく行ってしまったのだ。

「気にしないでください。私が悪いのです。……自分の都合を優先して、世間から隔離するような育て方をしてしまいました。年齢の近いあなたに仲良くしていただいて、別れが辛くなったのでしょう。仕方ありません。」

「僕にとっても、彼女との時間は、大げさかもしれませんが、今まで経験したことのない程、心満たされるひと時でした。タイラーさん、不謹慎かもしれませんが、僕は嵐に巻き込まれて、むしろラッキーだったと思っています。ここでの生活は、毎日仕事に追われて過ごすうちに見失っていた大切なものを思い出させてくれました。そして、命の危機を身近に感じたことで、それまで悩んでいたことに対する答えを見つけることも出来たんです。」

「それならばリース、どうか神様に助けられた命を、大切になさって、世の中のために役立ててください。」

「肝に銘じておきます。……最後に一つだけお願いがあります。タイラーさん、どうか僕に今回のお礼をさせて頂きたいのです。」

「お礼など必要ありませんよ。これが私の仕事の一番重要な役割で

すし。どうぞお気になさらないでください。」

「いいえ、それでは僕の気がおさまりません。今度街にいらっしゃったときに、我が家に招待させて頂けませんか？僕の家族もお二人に直接お礼が言いたいでしょから。」

「お気持ちだけで結構です。お察し下さい。ジェシーも私も知らない人に会うのが苦手です。」

「それでしたらなおさら、お孫さんのためにも是非ともYESとおっしゃって下さい。僕の妹は、確かジェシカよりふたつほど年が上なだけです。同じ年頃の友人を持つ事は、今の彼女に一番必要なことではありませんか？」

「さすが銀行家ですね。説得が上手だ。ええ。確かに、孫娘には、なによりも友達が必要だと思います。・・・それに、私もこの通りいつまで生きられるかわからない。今のうちに、独り立ちの準備をさせなければと考えております。」

「勿論、もし彼女が街で暮らすようなことがあれば、喜んで僕も僕の家族も全面的にサポートさせていただきますよ。・・・じゃあ、決まりですね。では、来週の土曜日はどうでしょう。楽しみにします。ああ、連絡先は御存じですね。招待をお受け頂いてありがとうございます。では、ジェシカによりしくお伝えください。」

リースは意気揚々とクルーザーに乗り込むと、タイラーに手を振って、島を去って行った。

リースのクルーザーが一直線に対岸に戻って行くのを、ジェシカはただ黙って、アランの腕に寄りかかったまま、いつもの草地から見

送っていた。

その日、夕暮れすぎて帰宅した孫娘に、タイラーは何も言わなかった。リースが招待の約束を反故にするようなことは無いとは思ったが、何かの都合で万が一駄目になったらと思うと、孫娘に要らぬ期待を抱かせるのは酷だと考えたのだ。

ジェシカは散々泣きはらしたような目をしていたが、その表情は意外なほど穏やかで、リースとの別れの場面で見せたような取り乱した様子は見受けられなかった。

タイラーは心の中で安堵のため息をついた。

妻の亡き後、灯台守として、半分世捨て人のような暮らしをしていたのは彼の選択であり、決して後悔はしていない。ただ、ジェシカのこれからの人生は今まで以上に幸せなものであって欲しい。

そして、そのためには、こんな孤島に縛りつけておかずに、そろそろ彼女を対岸の街に送り出さなければ。そこで、いろんな人と出会い、楽しいこと、辛いことも含めて様々なことを経験し、成長し、そして自分自身の人生を築いていくべきなのだ。

彼の愛する孫娘は、外見だけでなく内面の美しさがにじみ出るような素晴らしい女性になりつつある。ただ、人の悪意や世の中の醜い面を知らなさすぎて、自分が亡くなった後、一人で生きて行くにはあまりにも素直で純粹過ぎるだろう。それが彼のたった一つの心配ごとであり、心残りでもあった。

帰宅したリースが一番に取った行動は、父親に会うことだった。

スーツに着替えると、リースが無事に戻ってきたことを喜ぶ母や妹に簡単に事情を説明した後、すぐに父のオフィスに向かった。

「お父さん、話があります。」落ち着いた雰囲気の広々とした父のオフィスに入ると、リースはすぐに切り出した。

海が一望できる高層ビルの上層階の一室に、父親のオフィスはある。リース自身のオフィスも同じ階にある。

「リース、無事な姿を自分の目で見るまでは、心配で仕方なかったよ。本当に良かった。どこにも怪我はないのかい？」持ち上げた受話器を元に戻すと、父親は満面の笑みを浮かべて息子を迎えた。

「おかげさまで。いや、それどころか、ここを出発した時よりも健康になって戻って来ました。」リースは思わず微笑んだ。ジェシカの作った素朴な料理は、どれも美味しくて、つつい食べ過ぎてしまうくらいだった。普段ならまだ仕事をしているような時間に眠りにつき、日の出とともに起きる。そんな島での生活の中で、日々のストレスで疲れ切っていたリースは身も心もすっかり癒されていた。

「それは良かった。・・・ところで、なんの話だ？」

「はい。突然ですが、僕は、メラニーとの婚約を破棄するつもりです。」

「な、何を言い出すんだっ！」

「彼女の事は、幼馴染でもあるし、ある種の愛情を感じてはいます。教養もあるし、あの通り美人でもある。……。でもそれだけで結婚しても良いのかと心のどこかでずっと違和感を感じてました。クルーザーで沖に出て、静かな環境で独りになってじっくり考えようと思っていたら、今回の嵐に巻き込まれ……。その時思ったんです。もし命が助かるなら、これからは自分に正直に生きよう。絶対に後悔しない生き方をしよう。僕はメラニーに婚約解消を申し入れる決心をしたんです。そして、たどり着いた島である女性に出会いました。……。僕は、その女性を、ジェシカを好きになりました。ジェシカに対する気持ちは、今までどんな女性にも抱いたことのないものです。すべてが片付いたら、僕はすぐにでもジェシカに結婚を申し込むつもりです。」

「そんなの一時の気の迷いだ。いや、いわゆるマリッジブルーと言うべきか。メラニーの家族とは、殆んど親戚のようなものじゃないか。私も、彼女の父親もこれ以上のお似合いのカップルは無いと思っている。お前もこれまでそれを嫌がるそぶりなんて見せなかったのに。それをいまさら、彼女を裏切って、他の女性と結婚するなんて、許されないよ。」

「何と言われようと、無理なものは無理です。メラニーだって、他の女性に心を奪われた僕との結婚を喜ぶとは思えません。それこそ彼女に対して失礼だと思います。」

「落ち着いて考えてみる。一体誰なんだ。その女性と言うのは。島で出会ったとは？ あそこは確か古い灯台しかないだろう？」

「ジェシカは僕が助けてもらった灯台守のタイラーさんの孫娘です。ご両親は、彼女が幼いころに事故で亡くなったそうです。」

「灯台守の？それならば、余計賛成するわけにはいかないよ。そんな女性に婚約者を奪われたなんて知ったら、メラニーはこの街で生きていけないだろう。」

「“そんな女性”とはどういう意味でしょうか。お父さんは、ジェシカの事を知りもしないで。もう決めたんです。僕はどうしても彼女と結婚したい。メラニーには、これからちゃんと会って、わかってもらえるまで説明するつもりです。」 かつとなって思わず手を握りしめる。

「向こうはどうせ金目当てだろう。そうなんだろう？島で退屈してるときに、誘惑されただけじゃないのか。」 今まで一度も親に逆らったことなど無かった優等生の息子が一体どうしてしまったのか、父親は動揺を隠せない。

「僕の大事な人を侮辱するなんて、たとえ自分の父親であっても許さない。あの二人にはそれなりの敬意を払って頂きます。それから、早速来週の土曜日、ジェシカと祖父のタイラー氏を食事に招待しましたから。ご自分の目で確かめてください。金目的とか、誘惑とか、そんな言葉を口にしたご自分を存分に恥じることになりますよ。」 息子の目が激しい怒りをたたえながらも、かつて無いほど冷淡に光るのを、父親は茫然としながら見つめていた。

「お前は、いったいどうしたんだ。親に対して、なんて口のきき方を。」

「ああ、もうひとつ言い忘れてました。僕を育ててくれた両親には

深く感謝しております。が、これからはもっと自分の気持ちを優先することになりました。もう僕はあなたの言いなりにはなりません。もし、解雇するならばどうぞなさってください。この街から出て行くことも、やぶさかではありません。ジェシカ一人くらい、どこに住もうが、どんなことをしても食べさせる自信はありますから。」

リースはそう言い残すと、息子のあまりの変貌ぶりに、ポカンと口を開けたままの父親を残して、オフィスを後にした。

第四話

「何言ってるの？リース……。冗談にしても笑えないし、いたい何が言いたいのか、私にはさっぱり。」メラニーが両親と住んでいるレンガ造りの大きな屋敷の応接室は、海に面した広いバルコニーにつながっていて、2人はそこでお茶を飲んでいた。

突然久しぶりに自分から訪ねてきてくれた婚約者の言葉を、メラニーはすぐには受け止められないでいた。ショックのあまり頭の中が麻痺してしまったようで、うまく働かない。

「すまない。本当に、なんて言えばいいのか。だけど、どうしてもこのまま君と結婚するわけにはいかないんだ。わかってくれないか。僕はとうとう運命の人に出会えたんだよ。」

リースは罪悪感のためか、少し眉をひそめて、真剣な顔でメラニーを見つめている。それでも”運命の人”の事を語っているときは、どこかうっとりするような目をしていた。

なんて残酷な……。メラニーの心にどす黒い感情が溢れだす。父親同士が親しい友人関係で、お互いの家族はしょっちゅう行き来していた。物心ついたときから、大きくなったらリースのお嫁さんになるんだよと言われ続けて育ってきたのだ。

リースはどこに行っても人気者で、優しくて、ハンサムで、勉強でもスポーツでもすごく優秀で、婚約者としていつも鼻が高かった。

そろそろ結婚式の日取りを具体的に決めないとなどと、両親や周り

の友人たちにも言われ始めたところなのに。

「あなたは私にそんな仕打ちができるはずない。いまさら私たちの婚約が駄目になったりしたら、私はみんなの笑い物になってしまう。……そんなの、私には耐えられない。」友人達に陰で笑われるなんて、そんなの、絶対に嫌。悔し涙がジワリと目に浮かぶ。

「……婚約解消なんて、よくあることだよ。それよりも、お互いの気持ちに嘘をついて結婚する方が間違っているんじゃないかな。」

「私はあなたと結婚したいの！お願いっ。私のどこがいけないのかはつきり言ってくれたら直すから。何でもするから、考え直してほしいの。」リースの目をみたら、どれだけ本気かよくわかる。小さい頃から一緒に育ってきたようなものだからこそ。

何を言っても彼の気持ちは変えられないかもしれない。メラニーは絶望を通り越してパニック状態になる。

「本当のところ、彼女に会う前に既に気持ちを固めていたんだよ。君に対する愛情は、家族や友達に抱くようなもので、恋人に対する気持ちとは違うと以前からなんとなく気づいていたんだ。だから、このことは決して彼女のせいじゃないんだよ。」

「だから何なのよ？どちらにしても、私は振られてたってことなの？酷い。私は何も悪くないのに、どうしてこんな仕打ちを受けなければならぬの？……私はあなたを絶対に許さない。あなたも、あなたを私から奪ったその女も、地獄に落ちればいいんだわ。」怒りの感情があまりにもすさまじくて、次から次へと呪いの言葉が口から出てくる。

「僕の事はいくら恨んでくれても構わない。それだけの事をしてしまったんだから。でも、彼女は何も悪くないんだ。だから、彼女にもし少しでも害を与えるようなことをしたら、僕は容赦しないから。それだけは覚えておいてくれ。じゃあ僕はもう行くよ。ご両親には僕から話をするから。」

今、目の前に居るハンサムな男は、彼女のよく知るリースじゃない。メラニーはぞっとした。こんな冷たい目をする人じゃなかったのに。彼女を護るためなら、私に危害を加えるというの？

ありえないわ。だって、彼は私のものなんだから。これまでも、これからも。

リースは席を立ち、応接室のドアに向かって歩き出した。これからメラニーの父親に会いに行くのだろうか。

「待って！！！わかった。あなたの言う通り、婚約は解消しましょう。」メラニーは慌てて椅子から立ち上がり、リースの方へ近づいた。

ドアノブに手をかけたまま、リースは振り向いた。

「メラニー？」

「ただし、今すぐというのは止めていただきたいの。両親にも私から話すわ。私があなたをその女性に奪われたなんて、絶対に思われたくないから。」私”があなたを振ったってことにしたいの。・・・だから、今まで通り私と仲良くしてほしいの。そして少しずつ私があなたへの興味を失ったかのようにまわりに示すようにした

ら、私も面目を失わずに済むし、あなたの大事な人も、悪者にならなくて済むでしょ？」

「君がそう言うのなら、僕は喜んでその案に従うよ。今回の件で君の評判を傷つけずに済むのはそうするのが一番だろう。・・・本当にありがとう。君がわかってくれてどれだけ嬉しいか。」

リースはメラニーをぎゅっと抱きしめた。兄が妹に与えるようなハグだった。

「さっきはきついこと言ってごめんなさい。こんなことになっても、あなたは私の大切な幼馴染に変わりないでしょ。あなたがどんな女性を選んだか知りたいし、もしできれば良いお友達になりたいわ。」

「君は本当に優しい人だね。心が広くて、そしてとても美人で。こんなに魅力的だからこそ、君の周りにはいつでも沢山ボーイフレンドがいるのも納得できるよ。」

「あら、知ってたの？でも誰とも真剣なお付き合いをしてたわけじゃないのよ。いろんなボーイフレンドと遊んだりしたのも、すべてあなたが嫉妬してくれるかなって思ってた。」メラニーは慌てて言い繕った。

「そうなのかい？僕はてっきり。いや別にいいんだよ。責めてるわけじゃないんだ。知ってると思うけど、僕だってまるっきり潔白ではないし。お互い様ってことで。・・・じゃあ、これからは良き友人としてよろしく。」リースはそう言って、いたずらっぽく笑う。それはメラニーの大好きな彼の表情のひとつだった。

「・・・ええ。でも忘れないで。しばらくはまだ婚約者のふりをし

てね。」メラニーもいたずらっぽく笑い返した。たとえそれがただの作り笑いだとしても、幸せいっぱいの彼には気づかれないうだろう。

（私の心をずたずたにして、そう簡単に許されると思ってるの？）

「わかってるよ。・・・ではまた。」

「さよなら。また近いうちに。」

リースが去った後、メラニーは応接間のテーブルから煙草を取り上げて、火をつけた。

吐き出した煙を目で追いながら、ニコチンの力を借りて一心不乱にリースを取り戻す方法を考え始める。

こんなことなら、大学を卒業した後すぐにでも結婚すればよかった。ただ、リースもまずは仕事をじっくり覚えたいと言っていたし、自分もその前にもっと遊びたかったのだ。

リースは確かに完璧で夫にするなら彼以外は考えられないけど、正式に結婚する前なら、こっそりと一時の火遊び程度の恋を楽しむくらいは、ばれさえしなければかまわないと思っていた。

逆に、結婚すればそんなことはおおっぴらには出来なくなるとわかっていたからこそ、次から次へと後腐れの無いような、その場限りの短い恋の相手を求めたのだ。

まさかリースがそれに気づいていたなんて、知らなかった。

かなりの誤算である。

それでもリースを諦めるつもりは毛頭無い。私は悪くない。悪いのはリースなのだ。

私が黙って身を引くと思ったら大間違いよ。

バカな男だわ。まったく。お坊ちゃまってすぐに人を信じるんだから。

メラニーはリースの間抜けぶりを鼻で笑った。

まずは、リースの言うところの”運命の相手”を排除しなければ。どんな手を使っても良い。

お金目的ならば、適当に渡して消えてもらえばいいし。

そうじゃなければ、何か別の方法をとらなければならないだろう。

どちらにしても悩ましい事態だ。

これから忙しくなる。

メラニーは深いため息をつく、短くなつた煙草を大理石の灰皿でもみ消して、足早に部屋を去って行つた。

第五話

太陽が水平線から顔を出す頃、私も暖かい寢床から抜け出して、朝食の支度を始める。

いつものように、ベットの足元から降りてきたポーシャが足にまわりついて、ミルクをねだる。

ラジオから流れてくる曲を口ずさみながら、三つ目の卵を割ろうとして、手が止まった。

リースが居なくなつて、もう何日も過ぎたのに。

クスリと苦い笑いがこみ上げる。胸がちくりと痛むのには、もう慣れたけど。

元気かな？

もうわたしたちの事なんて、すっかり忘ちゃったよね。そうして毎日、仕事やデートで忙しくしてるだろうな。

今日は土曜日で、天気も良く、海も穏やかなので、祖父と船で対岸の街へ買出しに出かけることになった。

そしてなぜか祖父と2人で、船着き場から通いなれた市場へと続く道ではなく、普段はめったに立寄る事のない、繁華街へと向かっている。

一番賑やかな通りに出ると、一際大きな洋品店へ入って行った。

「いらっしやいませ。」すぐにスマートな女性の店員さんが声をかけてきた。

祖父は、なじみのない雰囲気にも、どうしてよいかわからず縮こまっているわたしの背中を、その女性の方に押しやった。

「孫のために、何点か選んでもらえますか？ちよつとよそいきにも使えるような洋服と靴を見つくるってやってください。」

「勿論ですわ。さあ、お嬢さんどうぞこちらへ。」

仰天して固まっているわたしの腕をさっと掴んで、店員さんは店の奥の方へ連れて行った。

改めて良く見ると、今日はなぜか祖父の普段着である、古びたワークシャツと、ジーンズではなく、ぱりっとしたブルーのストライプのワイシャツと紺色の麻のズボンを履いている。焦げ茶色のブーツもピカピカに磨かれているのがちらりと見えた。ひげだっていつもより綺麗に剃っている。

それほど背は高くないが、年齢に似合わず引き締まった体つきの祖父の瞳は明るいブルーで、長年海風にさらされて、肌は赤焼けしているが、年をとった今でも十分素敵だと思った。

店員さんは、私の瞳の色と、髪の色を見て、にっこりすると、すぐにきれいな藍色のワンピースを持って来た。一見シンプルな形だが、よく見ると生地のカッティングや、ギャザーのよせ方が凝っていて、試着させてもらったらサラサラと流れるようなラインがとても美しかった。

そのほかにも、白っぽいベージュのレースに、モスグリーンと黄色の小枝柄の刺繍が細かく入ったブラウスとふんわりとした淡いグレーのスカート、ラベンダー色の身体にぴったりしたシルエットのワンピース等、触れる事さえためられるような素敵な洋服を次々見せてくれた。

初めてヒールのついた靴を履いて、ドキドキしながら店の中を歩いてみる。

背中がぞくぞくするような、少しだけ大人になった気分。

次から次へと手渡された服を着たり脱いだりを繰り返したあと、祖父は何を思ったか、全部下さいと言いだしたので、私は慌てて祖父のそばに駆け寄って、腕を引っ張った。

祖父は私に、最初に試着した藍色のワンピースと、リボンのついた白いサンダルを身につけるように言くと、店員さんには、私が着ていた洋服はほかの服と一緒に包装するように頼んでいる。

おたおたしていると、別の店員さんが現れて、沢山買っていたのだから、サービスですよと言って、お店に展示してあった、小さな花飾りのついた髪留めを使って、腰まである長い髪の両サイドを編

んで、後ろでひとつにまとめてくれた。

「おじいちゃんっ、一体どうしちゃったの？お洋服や靴、こんなにいっぱい買い物して、大丈夫なの？」荷物の準備が出来るのを待っている間、小声で祖父に訊ねた。

普段はバザーや、市場にある、若者向けの安売りの店で洋服を買っているのに。こんな高級なお店、おじいちゃん一体どこで知ったんだろう？

「ジェシーもそろそろ、大人の女性にふさわしい、ちゃんとしたお洒落を覚えないとね。それにこんなの、必要最小限だよ。街に住むようになれば、こんなんじゃ足りないくらいだよ。」

「……街に住むって？どういうこと？」心臓がピクリとする。

自分の耳を疑った。

わたしたち、街に住むことになるの？

「いつまでも、こんな年寄りと二人きりで孤島に住むわけにもいかないだろう。」祖父はそう言うと、少し悲しそうに目をそらした。

あこがれのファッション雑誌から抜け出したような、上品で洒落た洋服や靴に囲まれて、浮き浮きと華やいだ気持ちになっていたのが、一気に冷める。

定員さんが、大きな包みをいくつも運んできた。祖父は支払いを済ませると、私を促してお店の外に出て、人ごみでごった返す広い通りを歩き出す。

「おじいちゃん、灯台守やめちゃうの？」祖父のかかえる大荷物を半分引き受ける。

「やめないよ。まだもう少し身体が自由に動く間は、仕事を続けたいと思っている。」

「じゃあ、なんで、街に住むって、どういうこと？」

「これ以上お前が寂しい思いをしなくて済むようにしたいんだよ。いい加減、友達を作ったり、いろんな人と知りあって、自分の世界を広げて行くべきなんだ。おじいちゃんのわがままで、いつまでも手元に置いてしまつて、申し訳ないと思っている。・・・お前には黙っていたんだが、実は今、知り合いにお前の仕事の口を頼んでいる。」

「そんな・・・島の生活は、全然寂しくなんて無い。それに、そんなに急に、嫌だよ。無理だよ。・・・わたし独りで街になんか住めないよう。」おじいちゃんもいるし、アランもいる。そしてポーシャだっている。わたしは今今まで充分幸せなのに。

「突然こんなふうに話すつもりじゃなかったんだ。びっくりさせてしまったね。でも、おじいちゃんは何年も前から、お前が年頃になったら、いつかはと覚悟してたんだ。」

祖父の口調は淡々としていて、まるで自分自身に言い聞かせるかのようだった。

「おじいちゃんを島に独りにはさせられないよ。わたしが居なくなったら、誰がご飯を作ったりするの？」最後の抵抗を試みる。

「大丈夫だよ。独りには慣れてる。．．．それに、料理や洗濯だって、ジェシーに教えたのは、この私だと言うことを忘れないでくれ。」

「でも．．．。」不安で胸が押しつぶされそうになる。

「二度と会えないわけじゃない。こうやって、毎週のようにお前に会いにくるよ。だから、おじいちゃんに任せてくれないか。悪いようにはしないから。」

「．．．うん。おじいちゃんがそう言うなら。．．．お勤めするようになったら、お金貯めて、おじいちゃんに楽させてあげられるように頑張るね。」わたしはそう言って、祖父の腕にギュツとしがみついた。

祖父だっていつまでも働けるわけではないのだ。もっと年をとって、今の仕事を引退したら、今度はわたしが働いて、面倒をみる番なのだ気がついた。それならば、いつまでも祖父に甘えているわけにはいかないのだ。

「わかってくれたんだね。」祖父はほっとした様子で、笑顔を見せてくれた。

「でも、わたしはこのとおり何もできないし。わたしなんかを雇ってくれるところなんて、見つかると思う？」試験を受けて、一年繰り上げて高校卒業の資格は取り終えていたが、それでも世間知らずの田舎者には変わりない。

「船乗り仲間のひとりが、数年前から、港湾関係の会社を経営して

るんだ。うちの孫は、いくつか外国語もできるし、タイプも打てると言ったら、やる気があるなら、いつでも面接してくれると言っていたよ。」そう言って、一枚の名刺を渡してくれた。

「港湾？？どんな仕事なんだろう。でもわたし、出来る事なら何でもやりますって言って、頑張るつもりだよ。だから、心配しないでね、おじいちゃん。・・・それと、今日は沢山買ってくれて、有難う。」渡された名刺をそっとバックの内ポケットにしまいこんだ。

「島に戻ったら、さっそく履歴書の書き方を教えてやろう。それが出来たら先方に連絡してみる事にするよ。」

「うん・・・わかったよ、おじいちゃん。」空元氣も長くは続かない。具体的に履歴書とか、先方に連絡するとか言われて、内心戸惑っている。

祖父は前から考えていたと言うだけあって、すっかり根回しをしていたようだが、わたしにとっては青天のへきれきとも言うべき事態だ。

あまりにも急激に自分の人生が変わっていくような気がして、大きな不安が押し寄せる。でも、それと同時にほんの少し、漠然とした将来への期待が混じっている。

新しい生活、新しい出会い。わたしはどうなっていくのだろう。

山のような包みを一旦置いたために、船に戻る事にした。

いつも利用している船着き場のすぐそばに、見慣れない車が停まっ

ていた。

私たちが近寄ると、運転席から、サングラスをかけた若い男の人がおりてきた。

少しウェーブのかかった、つやつやの茶色の髪。

うそ・・・でしょ？

サングラスを外して、笑いかけてきた顔を見て、わたしは息が止まりそうになる。

「こんにちわ。待ちきれなくて、無理やり仕事を途中で切り上げて迎えに来ました。」

ビジネススーツに身を包んだリースは、近寄りがたいほどかっこよかった。

余りにも素敵過ぎて、彼がわたしたちに、いかにも自然な様子で話しかけている事に違和感を感じてしまうほどだ。

リースは祖父と親しげに握手を交わすと、驚きのあまり動くこともしゃべる事も出来ずにいるわたしの手から洋服の包みを取り上げた。

「ジェシカ、見違えたよ。すごく大人っぽくて、最初すぐにはわからなかったくらいだ。それに、ずいぶんと沢山買いこんだようだね。・・・どうした？なんでそんなにビックリした顔してるの？」

もう二度と会うことは無いと思っていた人が、こんなに近くにいて、わたしに話しかけている。

「あの、どうしてここにいらっしゃるんですか？」

「どうしてって、君たちを招待したからさ。」

「招待????？」

「お世話になったお礼がてら、食事でもと、タイラーさんをお願いしたら、快く承諾してくれたんだよ。さ、車に乗って。うちの両親も、妹も君たちに会えるのを楽しみにしてるんだ。」

リースはわたしの荷物を全部車のトランクにおさめると、後部座席のドアをあけて、わたしたちを中に座らせた。

高級車の広い後部座席に座ってから、とぼけ顔の祖父を横目で睨んだら、少し困ったような笑顔がかえってきた。

祖父が前もって何も教えてくれなかったことを少しだけ恨めしく思ったが、もし初めからこの事を知っていたとしたら、私は前の晩一睡もできなかっただろう。

こうして、わたしと祖父は、リースに連れられて、リースとリースの家族が住む家へと向かうことになった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4834z/>

A LOVE STORY OF AN OLD LIGHTHOUSE

2011年12月21日20時50分発行